

## 1940年代末中国共産党内における経済政策の相克

——劉少奇の「天津講話」をめぐる——

杜 崎 群 傑

本稿は劉少奇によって行われた、いわゆる「天津講話」を中心に、中華人民共和国成立直前の1940年代末における、中国共産党内の政治経済政策をめぐる論争を検証するものである。

内戦の勝利を目前にした共産党は、自らの手で中国という国家を建設・運営すべく、様々な行動を起こしていた。しかし、社会主義政党としての共産党は経済政策の失敗による中国国民党の下野を目の当たりにしており、また脆弱な革命政権であるがゆえに、否応無しに社会主義的政策に一定の距離を置き、ブルジョアジーに配慮せざるを得なかった。

そこで本稿は、こうした共産党によるブルジョアジーへの配慮として象徴的な劉少奇の天津講話を分析することによって、当時の共産党の経済政策の実態を明らかにする。さらに天津講話に対する論争を手がかりに、共産党内における経済政策の相克についても検証する。これはまさに、共産党がいかにして政治経済政策を通して大衆の同意＝正統性を調達しようとしていたのかを検討することに他ならない。

### はじめに

本稿は劉少奇<sup>1)</sup>によって行われた、いわゆる「天津講話」(以下、括弧略)を中心に、中華人民共和国(以下、中国)成立直前の1940年代末における、中国共産党(以下、共産党)内の政治経済政策をめぐる論争を検証するものである<sup>2)</sup>。

1) 共産党員。当時、中国共産党第7届政治局委員、書記処書記、中国共産党中央工作委員会書記など。後に、中央人民政府副主席、中央軍事委員会副主席などを歴任。また日中戦争後、毛沢東が重慶で会談を行っている間には中国共産党中央主席を、国共内戦中の華北にあっては党中央の日常業務を取り仕切った。馬洪武・王徳宝・孫其明編(1988)『中国革命史辞典』北京：檔案出版社、730-731ページ。

2) なお、ここでいう「ブルジョアジー」とは、劉少奇によれば帝国主義・封建主義・官僚資本家を除いた、小ブルジョアジー・民族ブルジョアジー・自由主義ブルジョアジーが含まれていたようである。ただし、それぞれの違いについて、明確な規定があったのかどうかについては定かではない。

内戦の勝利を目前にした共産党は、自らの手で中国という国家を建設・運営すべく、様々な行動を起こしていた。こうした中で特に都市における政治経済政策に関しては、党のイデオロギーに基づく政策を採用すべきか、あるいは市場主義的であるべきか、共産党は判断を迫られていた。前者は根拠地での経験を活かした均分政策による労働者優位の政策を指すが、しかしこうした方針は都市における企業経営者＝ブルジョアジーの逃亡と、これに伴う企業の倒産を招き、経済全体に悪影響を与えかねない状況になりつつあった。

共産党は経済政策の失敗による中国国民党の下野を目の当たりにしており、また比較的脆弱な「革命政権」であるがゆえに、否応無しに社会主義的政策に一定の距離を置き、ブルジョアジーに配慮せざるを得なくなったのである<sup>3)</sup>。

本稿では、こうした共産党によるブルジョアジーへの配慮として象徴的な劉少奇の天津講話を分析することによって、当時の共産党の政治経済政策の実態を明らかにする。さらに天津講話に対する論争を手がかりに、共産党内における政治経済政策の相克についても検証する。これはまさに、共産党がいかにして経済政策を通して大衆の同意＝正統性を調達しようとしていたのかを検討することに他ならない。

実はこうした劉少奇による天津講話については、これまであまり注目されてこなかった。背景として考えられることは、同講話は当時からすでに高崗を中心とする東北グループからも批判されており、さらに後の文化大革命においては林彪などのグループによって批判されたこととも関係すると思われる<sup>4)</sup>。すなわち少なくとも中国においては敏感な問題であるがゆえに、いわゆる「改革開放」政策によってその存在が注目されるまでは検証すらできないものであったと考えられる。

唯一、中国においてこれを正面からとりあげたものとして、李文芳がいるが、「改革開放」を肯定する観点から、天津講話を持ち出しているために、この天津講話を通して共産党が自らの政権運営にどのように活用していったのか、あるいは当時党内でどのような議論が行われていたのかについては、必ずしも明確ではない<sup>5)</sup>。

---

3) 筆者のこれまでの研究によれば、こうした傾向を如実に示しているのが石家荘市人民代表大会であった。拙稿(2011a)「中国共産党の市レベルにおける統治の正統性調達過程——1949年開催の第1期石家荘市人民代表大会を中心に」『中国研究論叢』第11号。また当時共産党は、丸山眞男が指摘するところの、「自発的な服従」を得るための、「正統性的根拠」を必要としていたと考えられる。丸山眞男(1995)『丸山眞男集』第5巻、岩波書店、153ページ。

4) 詳細は次節以降で検討するが、本稿におけるこのような共産党内の議論は、共産主義を掲げる政党にとっては普遍的な議論のように思われる。むしろ今日の中国においても同様の議論が存在しているようであり、注目に値する。梶谷懐(2015)『日本と中国、「脱近代」の誘惑——アジアのものを再考する』太田出版。

5) 李文芳(1999)「対劉少奇“天津講話”的再認識」『党的文献』第70期、35-40、74ページ。

他方、当時のブルジョアジーに対する共産党の政策については、例えば民族資産家階級が集結する民主建国会について論じた水羽信男、共産党の民族ブルジョアジー政策の変転を見た楊奎松の研究がある<sup>6)</sup>。ただし、前者は共産党からの視点について論じられていない。また後者は共産党が一貫して（民族ブルジョアジーであれ）ブルジョアジーに警戒心を持っていたとされているが、筆者は共産党はそれにもかかわらず、やはりブルジョアジーに一定程度の配慮をせざるを得なかったと考える。こうした課題を検討することは、必然的に「2つの路線の間を行なおうとする様々な可能性の模索」が「早晩閉ざされてしまう道」だったのかどうかという点について一定の示唆を与えることができるであろう<sup>7)</sup>。

### 1. 共産党による接収前の天津

天津という地域は、改めて指摘するまでもなく、古くからの経済・政治・軍事の要衝であった<sup>8)</sup>。天津は商工業が発展していたために、近代においても戦略的に重要な都市であり、ゆえに、ここの経済政策の是非が、政権の運営にも多大なる影響を及ぼす可能性を有していた。

日中戦争時期、天津は日本軍によって統治されていたが、日本の敗戦後は国民党が支配した。そして国共内戦後半の1949年1月15日に共産党が天津を占領し、ここから軍事管制委員会による、いわゆる接管政策が始まる<sup>9)</sup>。

ところが当初天津を占領した共産党幹部に待ち受けていたものは、戦闘によって荒廢した都市であった<sup>10)</sup>。しかも、天津に入った共産党幹部は、農村での活動が長い党員ばかりであり、工場管理などの知識を全く有していなかったために、これから接収する企業の「旧人員」から、さげすまれることすらあった<sup>11)</sup>。

ところで、天津に隣接している華北における当時の状況を見ると、経済政策に関する共産党の苦悩を見て取れる。

---

6) 水羽信男(2006)「共和国成立前後の民主建国会, 1945-1953年」久保亨編『1949年前後の中国』汲古書院, 75-101ページ, 楊奎松(大沢武彦訳)(2006)「共産党のブルジョアジー政策の変転」同『1949年前後の中国』103-137ページ。

7) 高橋伸夫(2007)「〔書評〕久保亨編『1949年前後の中国』中国政治史研究の立場から」『近きに在りて』第52号, 101-107ページ。

8) 天津地域史研究会編(1999)『天津史—再生する都市のトポロジー』東方書店。

9) 鄭質英編(1995)『天津市四十五年大事記』天津:天津人民出版社, 1ページ。

10) 中共天津市委党史資料徵集委員会・天津市档案馆編(1991)『天津接管史録』(上巻), 北京:中共党史出版社, 6ページ。

11) 「黄克誠給中央, 華北局総合報告—關於天津接収工作」中共天津市委党史資料徵集委員会・天津市档案馆, 前掲書, 102ページ。

例えば、共産党は1947年11月に石門（後の石家荘市）を占領し、初めて都市を接収することになったが、農村における大衆闘争の方式や均分政策を持ち込んだために、むしろ都市経済を混乱させていた。特に顕著であったのが、都心の資本家が共産党による統治を恐れて逃亡をはかり、企業などの経営が成り立たなくなってしまうという問題であった。

これに危機感を持ったのが他でもない中央の共産党指導者であった。特に劉少奇は華北を統治する代表者ということもあって、早くから都市経済の重要性を認識していた。そこで同年11月には、都市における秩序維持を強調し、都市の「機器を破壊してはならない。都市における破壊は農村よりも破壊性が大きく、これは人民の損失である」として、都市における「経済の維持」に注意を呼びかけている<sup>12)</sup>。

しかし、それにもかかわらず石家荘市の経済政策について言えば、その後も混乱は続いた。例えば、共産党中央は1948年11月30日の段階でも、石家荘市の幹部に対して「大衆組織」を「人民政権の支柱や党の情報源とし」、「軽率に工場の職工大衆、都市の貧民大会を開催し」、「その結果、我々と大衆を隔離させている」と批判していた<sup>13)</sup>。1948年後半の時点でも、共産党の都市政策は秩序をもたらすまでには至っていなかったのである。

では、なぜこれほどまでに中央の共産党幹部は都市の経済政策を重要視していたのであろうか。これは、劉少奇が度々共産党を「李自成」<sup>14)</sup>に例えていたことから理解できる。すなわち、当時共産党は都市における経済政策の失敗によって自らが「李自成」のように統治の正統性を喪失し、最終的に政権の座を奪われることを危惧していたのである。他でもない国民党の下野の一因がそこにあったからである<sup>15)</sup>。「李自成」の名前は、当時最高指導者であった毛沢東も度々取り上げており、同様の危機感は共産党指導者の間で共有されていたことがわかる<sup>16)</sup>。

これに対応するように、共産党は経済政策において資本主義に一定程度傾斜し、政策の重点を農村か都市に置くようになっていった。そして、まさにこうした意向を反映させたのが、共産党の7期2中全会である。また、同時期に開催された石家荘市人民代表大会（1949

12) 河北省档案館所蔵档案「少奇同志論城市工作」（档案管理番号：572-1-31-3）。

13) 拙稿（2011a）、前掲論文、「中央關於新解放城市中組織各界代表会的指示」中央档案館編（1992）『中共中央文件選集』（第17冊）、北京：中共中央党校出版社、529-533ページ。

14) 明末の農民蜂起の指導者。北京を陥落させ明王朝を打ち倒したものの、政策の誤りから民意の離反を引き起こし、さらに清軍の攻撃により敗退し政権の座も奪われた。その間、わずか40日と言われている。朝陽出版社編輯部編（1979）『中国歴史人物辞典』香港：朝陽出版社、513-514ページ。佐藤文俊（2015）『李自成一駅卒から紫禁城の主へ』山川出版社。

15) 久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士（2008）『現代中国の歴史—兩岸三地100年のあゆみ』東京大学出版会、133ページ。

16) 薄一波（1991）『若干重大決策与事件的回顧』（上巻）、北京：中共中央党校出版社、5ページ。

年7月開催)において採択された施政方針でも、ブルジョアジーに配慮する内容となっていた<sup>17)</sup>。

## 2. 天津の接収とその後噴出した問題

では翻って天津の接収についてはどうだったのであろうか<sup>18)</sup>。恐らく上記のような、石家荘近郊における接収の混乱を受けて——そしてより大都市であるために石家荘にもまして共産党は注意深く接収政策を行おうとしていった。

劉少奇は天津の占領当日、官僚資本の企業を接収するに当たり、「企業組織のもともとの機構を乱さないよう厳格に注意するように」と指示している<sup>19)</sup>。

また、その直前に中央軍事委員会によって発せられた指示によれば、今回の接収は「石家荘の接収初期に犯したような誤りを再び犯さないように」という嚴重注意がなされている<sup>20)</sup>。

当時、共産党天津市委員会書記であった黄克誠<sup>21)</sup>も、天津に入る高級幹部に対して、天津での任務を「敵の肅清」,「国民党反動の行政,文化軍事機構,公営企業・国家財産」の「接収管理」,「徹底的な改造」,「生産建設」として、接収の方針については、「混乱を避けること」,「必ず穩健であること」,「接収を完璧なものとし、破壊を避けること」とした。そして、天津進出後に規律を維持するために、「軍事管制期間内は集中制を実行し、全ての没収・逮捕・殺人あるいは外交事項について、その権力は市委員会に集中させ、いかなる部門あるいは個人も処理を行い、独断専行してはならない」とした。

黄克誠はさらに具体的な原則として、「言動は慎重であること」,「質素で苦難に耐えること」,「緊張して活動を行うこと」,「大衆に深く立ち入ること」を挙げている<sup>22)</sup>。

これらは、いかに共産党が慎重に天津の接収を行おうとしていたのかを示している。しかし接収後(あるいは過程)に生じるであろう別の問題、具体的には労働者に比して、資本家

17) 拙稿(2011a),前掲論文,拙稿(2011b)「中華人民共和国成立前夜における華北臨時人民代表大会の研究—中国共産党の地方における統治の正統性確立過程」『中国研究月報』第762号。

18) なお接収管理政策を研究したものとして、林幸司や泉谷陽子の研究がある。林幸司(2009)『近代中国と銀行の誕生—金融恐慌,日中戦争,そして社会主義へ』御茶の水書房,泉谷陽子(2007)『中国建国初期の政治と経済—大衆動員と社会主義体制』御茶の水書房。

19) ただしこの時、国民党の政治機構は「徹底して破壊するように」とも指示していた。中共中央文献研究室編(1996)『劉少奇年譜(1898-1969)』(下巻),北京:中央文献出版社,175-176ページ。

20) 「中央軍委關於準備接収北平,天津,唐山工作的指示」中央檔案館,前掲書,569-570ページ。

21) 共産黨員。後に中国共産党湖北省委員会書記,中国人民解放軍総參謀長なども歴任。馬・王・孫,前掲書,900ページ。

22) 以上の黄克誠の指示については「黄克誠同志向入津高級幹部的講話—關於接管天津的任務与方針」中共天津市委党史資料徵集委員會・天津市檔案館,前掲書,57-59ページ。



に対してどれほど配慮すべきなのかについては、事前の説明がないまま天津に入った。これが後に大きな混乱を引き起こすこととなる。

なお、実際の天津の接収は、15日から本格的に開始していった。黄克誠による報告によれば、市内の接収業務の期間は、3-7日であったとされている。したがって、遅くとも1月下旬までには完了していた。

黄克誠は、今回の接収は完全なもので、破壊も行われなかったと評価し、その理由として、幹部への事前の思想活動と、綿密な調査と十分な準備活動を挙げている。しかし、教訓として、「入城と接収を行う幹部は質を重視し、量を重視するべきではない。完全に農村において業務を行っていた区・郷の農民幹部は、都市の接収活動に不向きであった」とも指摘し、「今回の天津の接収の中で、多くの幹部は人々の会計帳簿を読むことができず、英文の簿記を読むことができず、旧人員に我々を軽視させ、我々には人材がいまいと言われることになってしまった」という事例を挙げている<sup>23)</sup>。今まで農村で活動を行っていた幹部を採用したことによる弊害が生まれつつあったことがわかる。

一方、天津の軍事管制委員会による報告によれば、接収後「労資の紛糾問題」が顕在化していた。すなわち、ブルジョアジーは、「闘争を恐れ、分配を恐れ」、「ある者は労働者を管理する権利を得られるかどうか疑っていた」。ブルジョアジーは全体的に、共産党への政策に懸念を抱いていたようである。他方、労働者は、「職場復帰を要求し」、また一部は「待遇の改善を要求していた」。これに対して現場の幹部は「労働者が目の利益を獲得することに満足し、労働者の永久的な利益を考慮しない」という状況であった。すなわち、労働者の待遇の改善ばかりを考慮した結果、企業経営そのものを成立させなくし、結果的に失業者を増やすことになっていた。

こうした状況への対策として軍事管制委員会は、「労資紛糾を解決し、全力で生産を回復する」こと、工場の接収管理においては、「元のまま手をつけない（原文「原封不動」——筆者注、以下同様）」ことを主な方針とした。しかし、この方針について、労働者は「旧人員をすぐに処理しないこと」、「元のまま手をつけない」ことに対して不満を示し、「改善を要求する」者もいた<sup>24)</sup>。

上記の黄克誠や軍事管制委員会の報告が示すように、天津の共産党幹部は接収政策に関し

---

23) 「黄克誠給中央、華北局総合報告—關於天津接収工作」中共天津市委党史資料徵集委員会・天津市檔案館、前掲書、98-103ページ。

24) 以上の事実については、「天津市軍事管制委員会市政接管処接管工作經驗」中共天津市委党史資料徵集委員会・天津市檔案館、前掲書、103-107ページ参照。なお、労働者による同様の要求は「天津市軍事管制委員会接管部接管城市工作初步總結」中共天津市委党史資料徵集委員会・天津市檔案館、前掲書、109ページにも示されている。

ては比較的成功したという見解を示していたが、その完了後においては、また別の問題が生じていた。

このため劉少奇は「接収活動が一段落終え」たために、「現在の任務はいかにしてこの都市を改造・管理・発展させるのかということである」とした<sup>25)</sup>。

また薄一波<sup>26)</sup>によると、「当時、民族ブルジョアジーは我々の都市政策に疑念を持っており、我々の中にも確かに『左』の気分を持っていた。このため、いかにして民族ブルジョアジーと団結し、また彼らを獲得し、迅速に私営企業の生産を回復し発展させるのかという活動は、速やかな解決が待たれる大問題であった」<sup>27)</sup>。

薄一波は北平(後の北京)・天津の工業生産における問題について、当時以下のように毛沢東に報告していたとしている。

都市と農村の交流が隔絶し、対外貿易が断絶し、原料が欠乏し、産品が売れず、通貨が膨張していること以外にも、(我々の)活動において公私・労資などの関係をうまく処理しないということも、突出した問題として存在している。「労働者・店員は、我々が工場や店舗の分割を許可し、清算闘争を進めるものと誤解している。天津の解放の1ヶ月以内に、53回の清算闘争が発生した」。「ブルジョアジーの頭の中には3つの恐怖がある。第1に清算への恐怖、第2に共産党が労働者の利益のみを考慮するという恐怖、第3に今後労働者を管理できなくなり、生産を行うことができなくなることへの恐怖である」。このため、彼らは消極的で、傍観の態度を取り、甚だしきは香港へ逃げる者もいた。天津の統計によれば、当時私営企業で操業をしていたのは、30%にも満たなかった。このような状況は転換させなければならない。労働者・幹部・ブルジョアジーに7期2中全会において確定した都市政策を説明し、労働者の中の曖昧な認識を正し、民族ブルジョアジーに存在する憂慮を取り除く必要があり、これはすでに一刻の猶予もないことである(括弧内筆者)<sup>28)</sup>。

同様のことは、天津講話後に作成された天津市委員会による文書の中にも記されている。

---

25) 「対天津工作的初次意見一在4月18日天津市委会上」中国人民大学中共党史系資料室編(1980)『劉少奇同志天津講話(内部参考)』(出版地・出版社不明)、6ページ。

26) 共産党員。1949年当時は中国共産党中央委員、中国共産党中央華北局書記、華北人民政府委員兼同政府第1副主席などを担当。後に中央人民政府委員、政務院政務委員なども歴任。外務省アジア局・震関会編(1957)『現代中国人名辞典』江南書院、522ページ。

27) 薄、前掲書、50ページ。

28) 薄、前掲書、50-51ページ。

当時は「できるだけ多くの我々と協力できる自由ブルジョアジーやその代表的人物を獲得」し、「都市の生産事業の回復と発展させる」必要があったにもかかわらず、「認識が曖昧であり、このために業務の方法において嚴重な偏向を引き起こした」。

当時毛沢東も、自由ブルジョアジーには「革命的な一面」があるために、彼らへの政策は「連合と闘争がある」とし、「連合を主とする」と主張していた。しかし、薄一波によれば天津市の幹部はこれについても「誤りを犯し」ていた。すなわち、「入城前、『ブルジョアジーとの接近を少なくするように』ということを戒めとし、入城以後も長期的に彼らと顔を合わさず、ブルジョアジーを探して座談することもなく、謙虚な気持ちで彼らの意見を聞くこともなく、彼らの困難の解決を手助けしなかった」。また、「労資が紛糾した時においても、常に労働者側の肩を持ち、ブルジョアジー側の営業の前途を十分に考えることもなかった」。

さらに天津市幹部は、「長年農村で活動をしており、都市に対して熟知しておらず、狭い経験主義をあがめ、知らず知らずのうちに農村の活動方式を都市に持ち込んでいた」。このため「労資関係においては冒険主義、平均主義を、職工関係においては闘争形式、整風形式」を持ち込んでいき、「労働者の生活の改善のみに着目し、労働規律には注意しなかった。職工関係においては、待遇の平等に向かい、生産力の発展に注意せず、職員の裕福な生活を目障りに思い、労働者の報復の思想に妥協していった」。

これもあってか、労働者側は、私営企業に対する「労働者の給与の改善について行きすぎがあり」、もともとの給与の4-5倍に倍増していた者もいた。「労働者は翻身（解放されて立ち上がるという意味——筆者注）を誤解し、高すぎる待遇を要求するだけでなく、労働規律を遵守せず、時間通りに出勤せず、真面目に仕事をせず、工場の規則を遵守せず、会議や娯楽によって生産の時間を占めさせ、工場の売買に干渉し、低予算のコストによって分配を多くしようとし、復職を強制するなどの、悪い現象を引き起こしていた」。

他方ブルジョアジーは、「消極的になり懸念を抱き」、「前途がないと考えるようになり、業務を怠り、中央の生産の回復と発展という中立的な任務の方針に対して、大きな妨害の作用をもたらし」ていた<sup>29)</sup>。

中央の共産党幹部にとってみれば、以上のような問題が天津、引いては中国全土の経済に重大な影響を及ぼすことに懸念を抱いたのであろう。ゆえに、劉少奇を含む中央の共産党幹部は、天津の接収後、現地の共産党幹部が経済政策にまで目を向けなかったことに不満を持っていた。天津講話はまさに、このような共産党幹部の認識の下、実行された。

---

29) 以上の点については、「天津市委会討論少奇同志指示的決定」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、116-127ページ。



### 3. 「天津講話」に見る劉少奇の主張

では実際の天津講話では、どのような議論が展開されたのであろうか。

#### 3-1 天津講話前における中国共産党中央の方針

劉少奇は3月5-13日の共産党の7期2中全会に参加している。同会議では、前述のように共産党の活動の中心を農村から都市に移すこと、「労働大衆と団結し、知識分子を味方とし、できるだけ多くの、共産党と合作しうる小ブルジョアジー・自由ブルジョアジーおよびその代表的人物を味方と」すること、都市において工業生産を回復・発展させることなどが取り決められた<sup>30)</sup>。

劉少奇は同会議で発言を行っており、都市における活動について、「一本槍」(「単打一」)というやり方は「必ず変更しなければならず、さもなければ過ちを犯すこととなるであろう」と指摘している<sup>31)</sup>。ただし、一方で「労働者は必ず依拠しなければならない者である」とも述べており、この時点ですでに曖昧な表現をしている。生産を発展させるためにはブルジョアジーに配慮しなければならないが、党のイデオロギーとしては労働者を優先したいという、相矛盾する選択があり、両者の間で苦悩している様子が見えがえる。

劉少奇の報告は毛沢東によって「全ての意見に私は同意する」と認定されていた上に<sup>32)</sup>、毛自身も同会議において都市政策を重視することを名言していることから<sup>33)</sup>、共産党中央の指導者の間には一定の共通認識があったものと考えられる。

その後、劉少奇は7期2中全会において決定された共産党の方針を貫徹させるために、共産党中央の委託を受けて、天津の視察と指導を行うこととなった<sup>34)</sup>。

劉少奇は4月10日には天津に到着し、最初に黄敬市長、天津公用局、天津工業処、天津貿易管理処による報告を聞いた。この時、劉少奇がいくつか意見を述べることはあったが、本格的な講話は18日から始まった。

劉少奇が講話を行った場所と日程は、以下のとおりである。天津市委員会(4月18日)、対内・対外貿易担当幹部会(20日)、「天津の活動に対する指示」の発表(24日)、天津国営

30) 「中国共産党第7期2中全会コミュニケ(1949年3月)」日本国際問題研究所中国部会編(1964)『新中国資料集成』(第2巻)、日本国際問題研究所、448-450ページ。

31) 中共中央文献編輯委員会(1981)『劉少奇選集』(上巻)、北京:人民出版社、419ページ、中共中央文献研究室(1996)、前掲書、185ページ。

32) 中共中央文献研究室編(1998)『劉少奇伝』(下)、北京:中央文献出版社、622ページ。

33) 「中国共産党第7期2中全会における毛沢東主席の報告(1949年3月5日)」日本国際問題研究所中国部会、前掲書、432-443ページ。

34) 中共中央文献研究室(1996)、前掲書、192ページ。

企業の職員に対して（25日）、天津商工業ブルジョアジーとの座談会（25日）、天津職工代表大会（28日）、華北職工代表大会（5月5日）、天津市委員会拡大会議（6日）。その他、日にちは定かではないが、天津の幹部会において幹部の質問に劉少奇が答えるという場もあった。以下、劉少奇が実際に天津でどのような講話を行ったのかを時系列順に見ていきたい。

### 3-2 天津市委員会（4月18日）

劉少奇はここでは天津の接収を賞賛しながらも、「現在の任務はいかにして、この都市を改造し、管理し、発展させるかである」とした上で以下のように述べた。「労働者階級に誠心誠意依拠しなければならない」。ただし自由ブルジョアジーは「闘争の対象」ではなく、「団結の対象である」。「もし自由ブルジョアジーを闘争の対象とするのなら、それは路線の誤りである。天津幹部は思想においてこの点についてはっきりしていない」。

劉少奇によれば、自由ブルジョアジーに対して、団結のみで闘争がないのは「右傾機会主義」であり、闘争のみで団結がないのは「左傾機会主義」であるため、自由ブルジョアジーとは「重点はやはり団結」であり、むしろ「自由ブルジョアジーは除外することはできず、彼らを発展させる必要があり、原則の対象がはっきりしていないと、自陣営を乱すこととなり、農村にいて中農を害するのと等しい」。他方、労働者の給与に関しては、「もともとの給与が低すぎた者は、増加させてよいが」、「その最高額がもともとの給与の50%を超えないようにし、あるいは給与が低すぎるために、50%を超えなければならない場合、政府によってこれを批准する」とした。

その上で劉少奇は毛沢東の「四面八方」という発言を紹介している。このうち「四面」とは「公私関係、労使関係、城郷関係、内外関係（それぞれ、公営と私営の関係、労働者と資本家の関係、都市と農村の関係、都市の内外と中国内外の関係の意味）」を、「八方」とはこれら「四面」のいずれにも気を配ることを指す<sup>35)</sup>。この「四面八方」という言葉はこの後の講話にも度々登場することになり、当時の共産党の経済政策にとっても重要な目標となっていく。

### 3-3 対内・対外貿易担当幹部会（4月20日）

ここでは、「現在は、公・私営は共同で発展するもの」であり、「国営と私営は対等であり、衝突するものではない」とした。私営企業に対しては、「主導的に彼らとの衝突を避け、彼らと経済的な連盟を行い、彼らと全面的に協力すべき」であると、し、「今日の重点は連合にあり、闘争にはない」と述べた<sup>36)</sup>。

35) 「対天津工作的初次意見」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、6-15ページ。

### 3-4 「天津の活動に対する指示」(4月24日)

ここでは、天津を管理し改造するために、「労働者階級に依拠し」、「知識分子を勝ち取り」、「我々と協力する自由ブルジョアジーとその代表人物を勝ち取る」か、あるいは「彼らに中立を保持させる」とした。劉少奇はここで政権に協力できる者として、「できるだけ多くのブルジョアジー、民族ブルジョアジー」を挙げており、「自由」とは形容を加えたものであるとしている。

そして、「天津のブルジョアジーは我々労働者階級の闘争対象ではないというだけでなく、むしろ団結し勝ち取る対象であり、連合は長期にわたるものとした。ただし、ブルジョアジーに対して、「ただ闘争があるだけで連合がないということでもなく、またただ連合だけで闘争しないというわけでもない」として、曖昧な表現を用いている。

その上で、「労資両利」(労働者と資本家双方の利益に気を配ること——著者注)について、労働者による資本家への要求が高すぎることを指摘し、工場の規則を守らない、管理者の指揮を聞かないといった行動を戒めている。そして、軍事管制委員会によって公布された、以下のような規定を紹介している。①「全ての公私の工場はできるだけ解放前の労働者・職員の生活水準を保障し、これを下げてはならない」、②「現在は軍事の時期であり、経済は困難であり、労働者の生活を高めることは現在は不可能であるが、将来的にはかならず高めることは可能であり」、「(これについて)労働者に説明を行い、彼らの了解を取る」、③「全ての公私の工場は必ず開業し、努力して生産を進めなければならない(括弧内筆者)」、④「工場と雇用主は、生産の必要のために労働者を雇い、解雇することができるが、全てはかならず生産の必要のためでなければならない」、「政治的な理由で労働者を除名してはならず」、「工会は工場側に労働者の雇用と解雇を強制してはならず、資本家も労働者を雇用・解雇する権利を有しない」、⑤「雇用主は労働者を叩いたり罵ったり虐待してはならないが、労働者は必ず工場の規則を遵守し、指揮に服従しなければならない」、⑥「労働者の会議やその他の活動はかならず労働の時間外に行わなければならない」。

さらに、劉少奇は労資の紛糾が解決できない場合は、公営の場合は上級機関によって解決し、私営の工場は労働局によってこれを解決するとした。

ところで、劉少奇はこの「指示」の中で、いわゆる資本主義による「搾取」について、興味深い議論を展開している。すなわち、「資本主義の搾取制度は完全に廃止することはできず、用途」があり、「今日の労働者の苦しみは資本主義が発展したために受けている苦しみではなく、資本主義が発展していないために受けている苦しみであり、現在の中国の条件の

---

36) 「在対内、対外貿易負責幹部会上的講話」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、15-18ページ。

下では、私的資本主義の搾取は若干の発展があり、国民経済にとって有利なものであり、中国にとっても有利なものであり、労働者にとっても有利なものである」としている。さらに、「一定の歴史的条件下において搾取には進歩性があり、拡大することができればよりよい」とまで言っており、「搾取」をむしろ肯定的に捉えている。これは共産党のイデオロギーから言っても、極めて突出した発言であると言えよう<sup>37)</sup>。後述するように、実はこの「搾取」に関する劉少奇の発言は、この後共産党内において重大な論争の対象となる。

### 3-5 天津国営企業の職員に対する講話（4月25日）

ここではまず、天津の国営企業において、かつて職員と労働者の間で紛糾があったことに触れ、過去に職員が労働者を叩いたり、罵ったりしたことに問題があるとし、その背景として「歴史的に資本家が職員を利用して労働者を圧迫したこと」、職員が「労働者を軽く見る傾向があった」ためであると劉少奇は指摘している。

しかし、劉少奇によれば共産党にとっては両方とも「雇用労働者」であり、また「中国人は知識分子が少ない」ために、「必ず職員と労働者は相互に団結」しなければならないとした。その方法としては、職員が、① 観点の是正、すなわち過去の肉体労働への軽視を改めること、② 自己批判、すなわち過ちを認め、その過ちを是正することとしている。②については、もし改正しない場合は、全員で監督を行うとしている。しかし、一方で「寛大に処理」するようにとも述べ、職員に対する配慮も見せている<sup>38)</sup>。

### 3-6 天津商工業ブルジョアジーとの座談会（4月25日）

ここでは現在の主要な問題は「生産の回復と発展であり」、また「政府は国営生産を發展する必要があるが、私営生産も發展させる必要がある」とし、これこそが「公私兼顧（公営企業と私営企業の両方を顧みること——著者注）」であるとした。しかも「将来、私営生産が公営を超えたとしても、政府はこれを恐れない」とまで述べている。

さらに劉少奇は「公私合作」についても提案しているが、これについては「合作が多く、合作が長く、公私両利であることを希望する」としつつも、「合作は完全に自由であり決して強制しない」としている。

劉少奇によれば、この座談会で資本家の方から徴税について、3%から1.5%に減額できないかという意見があったようである。これについては戦争中で国家の経費が困難であることから、劉少奇によって拒否されている。しかし、内戦が終了すれば負担が軽くなるという

37) 「対天津工作的指示」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、18-42ページ。

38) 「対天津国営企業職員の講話」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、42-53ページ。

ことも示唆している。

なお、資本家の中には、自らが「ブルジョアジー」と呼ばれたり、「搾取」という言葉を聞くことを恐れる者もいたようであり、当時の彼らの心境を示している。これに対して、劉少奇は「流血革命を経ない」とし、「将来中国の工業生産が過剰となったとき、すなわち社会主義を行うとき、私的資本の積極性は役目を終える」が、「それは数十年以後のことである」と指摘した。

ただし、闘争については「自然で、客観的なものであり、2つの対立する階級は、必ず闘争を通してはじめて両利となる」として、それ自体は否定しなかった。

そして、「搾取」については、「封建的搾取が除去された後では、資本主義の搾取には進歩性がある。今日は工場の開業が多すぎ、労働者への搾取が多すぎるというわけではなく、むしろ少なすぎる。労働者、農民の苦しみは彼らを搾取する者がいないということであり、あなた方は搾取する能力があり、国家人民に有利であり、誰もが賛成している」。「資本家の搾取は歴史的功績」があり、「今日の資本主義搾取は合法的であり、多ければ多いほどよい」と、さらに踏み込んだ表現をしている<sup>39)</sup>。

### 3-7 天津市職工代表大会（4月28日）

ここでは、まず共産党は労働者階級の最も忠実な友人であるとし、労働者階級の友人として、第1に農民、第2に小ブルジョアジー、第3に民族ブルジョアジーを挙げている。これとは対称的に、劉少奇は「3つの敵」として、「帝国主義、封建主義（その代表は地主階級）、官僚資本家」を挙げ、「国民党はその集中的代表者である」とした。

劉少奇はここでも「重点は連合であり、闘争ではない」とし、以前に天津の共産党幹部が、ブルジョアジーを打倒するというスローガンを出し、彼らの工場・商店を分割し、劣悪な結果を招いたことを批判し、「闘争によってブルジョアジーを消滅させれば、工場は減少し、生産も減退し、労働者が失業する」と注意を促している。ただし、「闘争だけで連合しないというのは誤りであり、連合のみで闘争しないというのも誤りである」ともしており、やはり曖昧な表現が見られる。

搾取については、これまでと同様に「奴隷的な搾取制度はすでに排除され、封建的搾取も排除したが、資本主義の搾取は現在はまだ排除できない」とし、「搾取する人間がいることは搾取する人間がいないことよりもよい」という議論を展開している。

その上で、長期的な利益、全体的な利益のために、労働者に対して、資本家に過度の要求をしないようにと戒めている<sup>40)</sup>。

39) 「在天津工商業資本家座談会上的講話」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、55-68ページ。



### 3-8 華北職工代表大会（5月5日）

劉少奇はここで、「現在は重心を都市に置く」ことを強調し、「都市と農村の関係をよくする必要がある」とした。そして天津において給与が高すぎるために、資本家が恐怖心を持っていることについては、「是正しなければ過ちを犯す」としている。しかし、「資本家のみに配慮し、労働者に配慮しないことも、重大な過ちを犯すであろう」ともしている。劉少奇自身も認めているように、「現在の問題は複雑であり、複雑な原因は四面八方に配慮しなければならぬ」だった。共産党や劉少奇すらも、どちらに重点を置くべきか混乱している様子が見て取れる<sup>41)</sup>。

### 3-9 天津市委員会拡大会議において（5月6日）

ここでは劉少奇はまず、天津講話を通して、資本家が喜び、彼らの気持ちが安定したことを報告している。そして、現在の問題は「労働者が喜んでおらず、幹部の思想も行き渡っておらず、消極的な態度で抵抗している」ということであるとし、これについては、説得という手段を用いることとした。

なお、資本家との合作については、「2、3年後、帝国主義、封建主義、官僚資本主義勢力が徹底的に肅清された後も、民族問題においてはブルジョアジーと合作しなければならない」としており、ゆえに「我々はプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾を強調しすぎる必要はない」としている。ただし、「現在は政治的に、労働者の地位を高める必要がある」、「いかなる資本家も友人になりえると考える必要はない」とし、資本家への警戒心を必ずしもといてはいない。あくまで彼らを利用することは、生産や経済のためにすぎないということであろうか<sup>42)</sup>。

### 3-10 幹部会

この他、具体的な日にちが資料には記されていないが、劉少奇は幹部会においても発言している。

ここでは劉少奇は、一部の幹部が職員の話のみを聞き、労働者の話を聞かない、あるいは労働者の話のみを聞き、職員の話を聞かないという状況について、「ただどちらかの話聞きさえすればいいというのは誤りである」としている。しかし、ここでは双方が真っ向から対立したときに、どうすればよいのかというところまでに話が及んでいない<sup>43)</sup>。

40) 「在天津職工代表大会上的講話」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、81-93ページ。

41) 「在華北職工代表大会上的報告」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、99-112ページ。

42) 「在天津市委擴大會議上的講話」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、113-116ページ。

43) 「在天津幹部会上所解答的問題」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、68-80ページ。

結果として天津講話もブルジョアジーへの配慮は盛り込んだものの、曖昧さを残したまま終了することになる。

#### 4. 「天津講話」のその後

以上、ここまで劉少奇の天津講話における具体的な内容を見てきた。一連の講話が示しているように、劉少奇はブルジョアジーに対して一定の配慮を示していた。ただし、ブルジョアジーとは「連合」が重点としつつも、「闘争」については完全に否定しないなどの曖昧な点も見られた。この点、党是として社会主義を目指し、労働者階級に配慮せざるを得ない共産党としての限界があった。

劉少奇による天津講話は後に太原・石家荘・張家口・唐山などにも転送されたということから、他の都市にも影響があったと思われる。

天津講話を受けて、天津市の幹部は6月に天津市委員会を開催し、劉少奇の一連の指示に対する議論を行った。ここでは天津接收当初の自らの政策の誤りを認めた上で、①自由ブルジョアジーの政治的革命的性と経済的進歩性を利用すること、②連合を主とし闘争を主としないこと、③資本家の積極性を出発点として、各方面の活動を改善すること、④労働者と資本家に正常な関係を打ち立てること、⑤思想的な指導を必ず強め、幹部の思想と大衆の傾向を常に収集し、批判と教育を加えること、⑥無組織・無規律の状態に対して、厳重な批判と教育を加えること、⑦「左」を正すことなどが決定された。

ただし、「労働者は決して抑制しない」、「左を正した後は、右傾も嚴重に防止する」とも述べており、やはり曖昧さが残る結果となった<sup>44)</sup>。

では実際に労資関係が極めて紛糾し、現場の共産党幹部が仲裁を行わなければならない状況になった時に、幹部達はどのように対応したのであろうか。ここからは資料上の制約のために、想像の域を出ないが、現場の共産党幹部は農村出身であること、党是としても、また自らの出自としても、労働者に配慮し、資本家を毛嫌いする傾向にあったことを踏まえれば、労資対立が先鋭化し、現場の労働者たちが自らの待遇の改善を求めて、共産党をつきあげた時、共産党幹部はむしろ労働者に肩入れしていったのではなかろうか。しかも、いわばガイドラインとなるはずであった劉少奇の講話自体が曖昧であったために、現場の幹部はいかようにも解釈できたのである。

少なくとも天津においては、その後も資本家と労働者の対立は解決することはなかったようである。例えば、1949年8月末に天津市の各界人民代表会議が開催された時、労働者は

44) 「天津市委討論少奇同志指示的決定」中国人民大学中共党史系資料室、前掲書、116-127ページ。

「資本家が口を開けばすぐに批判する」という状況であった。天津市の共産党幹部も労働者の発言の主導権を強調し、資本家間の分裂を利用するかのような主張をしており、必ずしも資本家に配慮しているとは言いがたい状況であった<sup>45)</sup>。各界人民代表会議は、本来であれば各界の人物が意見を出し合い、最終的に打開策、解決策を探りあう場であるはずであったが、労使関係はここに至っても完全には改善されていなかった。

他方この時期、劉少奇の「天津講話」と政治経済政策が中央共産党幹部においても重大な論争の種になりつつあった。

劉少奇は1949年5月に「天津の責任ある同志が完全に資本家を省みず」、「新聞においても資本家の悪いところだけを挙げ、資本家の良い面について言わず」、「党内思想においても私的資本主義の投機性や、破壊性のみを強調し」、「資本主義の制限のみを強調」しており、このために「多くの資本家が操業の停止・廃業あるいは逃亡の準備をしている」。これは「即刻ブルジョアジーを消滅させようとする傾向であり、実際は活動中の『左』傾冒險主義の誤った路線であり、党の政策方針と根本的に相反するものである」と指摘した上で、東北においても私的資本主義および民族ブルジョアジーに対する政策が、まだ解決されていないことを念頭に、以下のように批判している。「聞くところによれば、東北の都市での業務において」、「(天津と同様の——筆者注)傾向があるようであり、東北局が直ちに検討を行い、これを是正することを希望する」<sup>46)</sup>。

薄一波によれば、当時東北局の書記であった高崗<sup>47)</sup>はこの時、劉少奇の批判を受け入れたが、彼に対して恨みを抱いていたとしている。そして、「天津講話を写し取り、これを『档案』とし、ばら撒き、下心をもってデマを流し、悪辣にも少奇同志を攻撃し、党に疑義をとなえた」<sup>48)</sup>。

後のいわゆる「高崗・饒漱石事件」<sup>49)</sup>への伏線はここにもあったと考えられる。この時は、

---

45) 「天津市各界人民代表会議初歩総結報告」華北人民政府民政部編(1949)『各級人民代表大會各界人民代表會議經驗彙集』(出版社、出版都市不明)。

46) 「中央關於對民族資產階級的政策問題給東北局的指示」中央檔案館編、前掲書(第18冊)、318-319ページ。なお、この資料には劉少奇の名義は記載されていないが、薄、前掲書によれば、これは劉少奇によって作成された文書であることが記されている。さらに、このファイルはその外の地域にも転送されたが、その際、毛沢東は「もしこのような誤りを克服しなければ、路線の誤りを犯す」として、暗に劉少奇の発言が正しいことを認めている。

47) 共産黨員。当時、東北局書記以外にも、東北人民政府主席、東北軍区司令員兼政治委員、中国共産党中央委員、中央政治局委員などを担当。中国成立後においては、中央人民政府主席などにも選出されたが、いわゆる「高崗・饒漱石事件」によって批判され、1954年に自殺したとされる。馬・王・孫、前掲書、889ページ。

48) 薄、前掲書、57ページ。

49) この「高崗・饒漱石事件」の全文は明らかにはなっていないが、差し当たり以下の研究を参照さ

鄧小平や朱徳も劉少奇の擁護にまわり、また恐らくは毛沢東にもその考えがなかったために、劉少奇が批判の対象となることはなかった。ただし、当初天津講話を支持していた毛沢東ですら、劉少奇による「搾取は多ければ多いほどよい」などの主張については、「必ずしもこのようには言えない」として、暗に否定していた<sup>50)</sup>。

では毛沢東がこの時期、経済政策・ブルジョアジーの重視と、相対的に社会主義・労働者の軽視を伴う講話にどこまで同意していたのか。これについては資料の制約のため、知る術はない。楊奎松は、毛沢東はブルジョアジーへの警戒を緩めたことはないと指摘している<sup>51)</sup>。であるならば毛沢東にとっては敏感な問題であるがゆえに、劉少奇の言説が毛沢東の想像をこえた時、ある種の疑念が生じたという見方も可能であろう。

このようにして見ると、中国の成立直前において、共産党党内においても、① 経済成長を相対的に重視し、ゆえにブルジョアジーに配慮し、「搾取」（さらに言えば経済的格差）を認めるとい主張と、② 社会主義的な政策を重視し、このためにブルジョアジーを含む特権階級の淘汰を主張し、「搾取」を認めず、均分的な政策を目指すという、2種類の論争があったことが理解できる。

こうした論争は、実は後の劉少奇と天津講話の数奇な運命へとつながっていく。天津講話は上述の①のような主張を盛り込んでいたために、時として社会主義を標榜する共産党にとって、極めて敏感な問題をはらむものであった。ゆえに天津講話は、その時代の政治情勢によって翻弄されていくことになる。すなわち「搾取」すら認めた天津講話は、社会主義への絶対的支持を標榜する勢力にとっては格好の攻撃材料となり、まさにそのピークが文化大革命であった。この時、林彪やいわゆる「四人組」は劉少奇を下野させるために、天津講話を積極的に取り上げ、批判していった。もちろん、20年後にこの講話によって批判されるのは劉少奇は当時想像だにできなかったであろうが。

しかし、天津講話は鄧小平による「改革開放」以後においては、むしろ再評価されること

---

りたい。徳田教之『毛沢東主義の政治力学』慶應通信、1977年、天児慧『巨龍の胎動——毛沢東 vs 鄧小平』講談社、2004年、117-119ページ、磯部靖「連邦制の否定と地方保護主義——高崗・饒漱石事件と中央・地方関係の定位」国分良成・小嶋華津子編『現代中国政治外交の原点』慶應義塾大学出版会、2013年、115-140ページ。

50) 薄、前掲書、55ページ。なお、ここまで踏み込んではいないが、同時期に朱徳も「現段階は自覚的に資本家の一定限度の搾取を我慢しなければならない」としており、必ずしも劉少奇のみの考えだったというわけではない。また、鄧小平も当時、劉少奇の講話において「いくつかの間違えはある」ものの、「最も恐れていたのは『左』であった」として、劉少奇を擁護した。「關於工会工作的幾個問題」中共中央文献編輯委員會編（1983）『朱徳選集』北京：人民出版社、261-266ページ、薄、前掲書、57ページ。

51) 水羽、前掲論文、楊、前掲論文。

となる。「社会主義市場経済」を目指す鄧小平にとっては、天津講話はむしろ自らの政策の正しさを示す根拠となったのであろう。

現代中国においてはもはや天津講話というキーワード自体は登場することはなくなった。しかし、いわゆる「薄熙来事件」において、経済的格差が広がる中で、かつての毛沢東主義すなわち均分主義へのノスタルジーが復活し、これが薄熙来への一定の支持を集める要因となったという事実は、天津講話にて示されたような、経済政策にまつわる共産党内の議論はいまだに解決していないことを如実に示している。その意味で、天津講話における当時の共産党内の議論は極めて現代的な意味を有しているのである。

### おわりに

本稿は劉少奇の天津講話を通して、共産党の政治経済、政策を検証することにより、共産党の正統性調達の実態に迫ろうとした。

共産党は都市接收後の過度の労働者への支持から、都市の経済そのものを破壊しかねない危機に直面した。共産党の危機感は「李自成」という言葉に集約されており、同様の危機感は共産党中央の指導者に共有されていた。そこで共産党はブルジョアジーへの配慮によって、経済の回復に努めようとした。

こうした中で、天津のブルジョアジーを安心させ、経済を立て直すべく劉少奇が派遣され、天津講話が行われた。天津講話はその意味で言わばガイドラインとして経済政策の方針を決定するはずであった。

講話の内容を振り返れば、「四面八方」という言葉に示されているように、労働者と資本家双方に配慮することが盛り込まれており、ブルジョアジーとの「連合」も重視するものであった。このため、労働者の過度の待遇の改善要求を戒め、ブルジョアジーに対しては「搾取」を認めていった。

しかし、一方で劉少奇は資本家への「闘争」そのものについては完全に否定しておらず、これが中国成立期における政策の曖昧さと、資本家への配慮にも限界があったことを示していた。しかも、その後の天津市各界人民代表会議においてもブルジョアジーの地位は必ずしも改善されておらず、劉少奇の講話にも限界があった。

このようにしてみると、本稿の「はじめに」で提示した、「中間を行おうとする」可能性が「早晩閉ざされてしまう道」だったのかどうかという論点について、一定の示唆が得られる。この点について筆者は、当初よりゼロだったとは必ずしも言えないと考えている。なぜならば、これまで見てきたように中国成立直前の共産党は、ようやく勝利の道筋が開けたのみで、自らの権力基盤は完全には確立しておらず、さらに経済政策の失敗が自らの政権をも危うくしていたのを認識していた。そうであるがゆえに、共産党は当時正統性を必要として



いた。ただし、一方でこれまでの筆者の研究で明らかなように共産党は当時権力の掌握に努めており、少なくとも表面上は強力な政治体制が形成されつつあったということも指摘しておく必要がある<sup>52)</sup>。

では最終的に中間の道はいつ頃どのように閉ざされたのか、あるいは上述の制度的担保がどれほど共産党の強靱性につながっていったのかについては、1950年以降を見なければならぬ。この点に関しては今後の検討課題とする。

---

52) 拙稿, 前掲論文(2011a), 同, 前掲論文(2011b), 同(2010)「建国期の中国人民政治協商会議における中国共産党の指導権」『アジア研究』第56巻第4号。